

# アンコーナのチリアコ伝 (1)

The Life of Ciriaco d'Ancona (1)

久志 本秀 夫

## 1

一九七〇年夏に稿を終えた拙論は、アンコーナのチリアコ（一三九〇年頃—一四五五年頃）の伝記資料について紹介したものであったが、<sup>(1)</sup>本稿は、総合的なチリアコ伝を目ざした一試論である。チリアコの生涯全般にわたる詳しい評伝は、まだ世に出ていない。デ・ロッシはその略伝（一八八八年）において、主としてチリアコの旅程を復原し、それを裏付ける史料をすべて紹介した。<sup>(2)</sup>その後、新史料が発見され、また、デ・ロッシ自身の誤謬もあるので若干の修正が必要とされるが、チリアコ研究の出発点としての価値は、尚おとろえていない。一九〇二年、ツイーバルトはデ・ロッシを骨子とし、新しい文献を付加してチリアコ略伝をまとめた。<sup>(3)</sup>簡潔ではあるが、要所に配慮が及ぶ好論文である。五十年後、ツイーバルトを忠実にフォローしつつ、随所にデ・ロッシより直接得た知見を挿入したマッケンドリックによ

アンコーナのチリアコ伝 (1)

る略伝が出た。<sup>(4)</sup>だが、両者を比較しながら読んでいくと、マッケンドリックの方が少々荒っぽく感じられる所もある。<sup>(5)</sup>ところで、チリアコの前半生に関しては、一七七六年に出たテイラボスキによる略伝が最も重要性を持っている。<sup>(6)</sup>その理由は、チリアコの友人、フランチェスコ・スカラモンティが書いた同時代の史料を発掘して利用したためであった。<sup>(7)</sup>コルッチは、一七九二年にこの史料を公刊したが、<sup>(8)</sup>何分にも入手困難であり、かつ、現在の学問的水準よりなされた校訂と新しい註とが要望されている。また、コルッチは自己の刊本の序論において、テイラボスキにほぼ準拠してチリアコ略伝をものしている。両者に次ぐものとしては、フォイクトによるチリアコ伝がある。<sup>(9)</sup>彼もコルッチの刊本を参照しているが、テイラボスキを越える所のものはいさほどない。要するに、スカラモンティによる史料、テイラボスキ、コルッチ、フォイクトの三者による略伝が、チリアコ前半生の主要な資料である。

チリアコの後半生については、ボドナーの研究が比較的詳細である。<sup>(10)</sup>彼は特に、一四三五年より一四三七年までの東方旅行と、一四四四年より一四四八年までのペロポネソス半島への旅を中心とした期間とを、史料に即して復原した。

本稿においては、以上の諸研究を軸として、チリアコの生涯を概観する。

## 2

まず、我が国では知られる所の少ないアンコーナの歴史を略述して、チリアコが登場して来る背景としたい。<sup>(11)</sup>

アンコーナの町を創設したのは、シラクサーの僭主ディオニシオス一世（前四三〇年頃―前三六七年）であるともいわれ、<sup>(12)</sup>また、彼の専制を嫌って亡命したドーリア系ギリシア人であるともいわれる。<sup>(13)</sup>時は、前三九〇年頃であった。

アンコーナ東南約十キロのコネロ山（五七五メートル）が西北に伸び、丘陵の多い岬となってアドリア海に突出した位置に町づくりが行なわれた。その最尖端、三角形の頂点の如き地がグアスコ山（九七メートル）で、古代には有名な、アフロディテの神殿があり、今は大聖堂（一一八九年完成）が存在している。ここから西へ、肘の如き岬が出て北から湾を囲いこんでいる。この地形のお蔭で、イタリア屈指の良港が出来たのであった。ギリシア語で肘を意味するアンコーナが、そのまま地名となった。

アンコーナがいつローマの支配下に入ったかは、不明とする説<sup>(14)</sup>、第三次サムニウム戦争の中でも有名なセンチヌムの激戦が終った後、前二八九年とする説<sup>(15)</sup>、ピケヌム地方がローマの支配下に入った（前二六九年―前二六八年）後も、ローマとは同盟関係を保って自治を保持したとする説など諸説がある。

前一七八年、イリュリウム戦争に際して、アンコーナはローマの海軍基地となった。<sup>(17)</sup>

前四九年、ユリウス・カエサルは、ルビコン川を渡ると、ただちにアンコーナを占領した。<sup>(18)</sup>

帝政時代に入ると、アンコーナは対岸のダルマティアとの最短連絡基地として重視された。<sup>(19)</sup>トラヤヌス帝は、ダキア征服戦争の際、アンコーナ港を拡張し（一〇五年）、ダルマティアへの輸送の能率化を図った。一一五年、帝の業績を称える頌徳門が港の北端に建てられた。この門の碑文が、後にチリアコに多大の影響を与えることになる。

西のローマ帝国崩壊後は、東帝国ラヴェンナ総督領の一環として、<sup>(20)</sup>ペンタポリスの一部となった（五五一年―七二八年）。七二八年には、ロンゴバルディ人のスポレト公国に占領されたが、東帝国レオン三世の聖像破壊政策に反発して、意識的に支配に甘んじたようである。

七七四年、フランク王国のシャルルマーニュは、アンコーナを手に入れ、他のペンタポリスの諸都市と共にローマ教皇ハドリアヌス一世に寄進した。

八四八年、サラセン人が来襲して、強奪、破壊したが、八七六年には廃虚より再興し、ローマ教皇の宗主権を認めつつ、自治共和国の体制を維持する方向を定めた。<sup>(21)</sup>

九一七年、サラセン人の襲撃を退けた。この時は、トスカーナ侯とスポレト公との援助を受けた。

一一〇〇年代には、東帝国の援助を得て、ヴェネツィアと争ったが、一一五〇年に平和条約を締結した。一一六七年、神聖ローマ帝国フリードリヒ一世の攻囲を退けて、政治的経済的自治を守った。

一三四八年、リミニのマラテスタ家が突然アンコーナを占領し、一三五五年にアルボルノズ枢機卿に譲渡した。彼は聖カタルドの丘に啓を築いたが、一三八三年、民衆が蜂起して破壊した。この事件より数年後に、チリアコが生れる。

アンコーナは、一五三二年、ローマ教皇の直轄領となるまで、政治的自由と経済的繁栄とを享受した。地中海及び東方のすべての港と活発な商業関係を持っていたのである。チリアコが活躍する一四〇〇年代は、アンコーナの歴史における最後の輝きの時期でもあった。

### 3

ティラボスキが世に紹介したトレヴィヴィーゾ写本の第三葉目は、何者かによって破り去られている。既述の如く、この写本にはチリアコの前半生を語る唯一の史料ともいえるべきスカラモンティによる伝記があ

り、正に第三葉目にチリアコの家族や生年などが記してあったようである。

幸いなことに、ティラボスキより十三年前(一七六三年)にオリヴィエーリが刊行したチリアコのコンメンタリア断片に、チリアコの母の墓誌銘が紹介されているので、それをもとに彼の家系を調べる。まず、墓碑の原文を引用する。<sup>(22)</sup>

- (一) D. I. S.
- (二) MASIELLAE. K. F.
- (三) SILVATICAI
- (四) MODESTAE MYLIERI
- (五) KYRIACVS PH. F.
- (六) PICNICOLLES
- (七) PARENTI PIENITISS.
- (八) ET SIBI
- (九) CLARAEO. L. KORE
- (十) H. M. H. N. S.

第二行目の D. I. S. はオリヴィエーリの註によると、<sup>(23)</sup> Deo Immortali Sacrum の省略形とすることである。それに従って訳すと、「永遠の神より神聖なるものが」となる。

第二行目の K は Kyriacus の略、この場合は属格 Kyriaci。F は filia の略、この場合は属格 filiae。「キリアクスの娘の」の意。この K と F との省略形については、オリヴィエーリは何も触れていないので、コルッチの序論より引用した。<sup>(24)</sup>

第三行目の SILVATICAI は、SILVATICVS の属格 SILVATICI

であるべきだが、オリヴィエーリ、コルッチ共に何も言っていない。第二行目より第四行目までを訳すと、「穏和な妻にして、チリアコ・セルヴァティコの娘マシエルラ」となる。ラテン名キリアクス・シルヴァティクス、イタリア名チリアコ・セルヴァティコは、本稿の主人公チリアコの母方の祖父で、幼ないチリアコの面倒をよくみている。ここで母の名がマシエルラであることが分る。

第五行目の KYRIACVS が本稿の主人公のチリアコである。PH は、ティラボスキによると、父の名の省略であり、おそらくラテン名フィリップス、イタリア名フィリップであろうとのことである。その場合 PH は *filius* の属格 *filii* の省略形となる。

第五行目より第六行目までは、「フィリップの子、チリアコ・ピチェニコルリ」となるであろう。ラテン名ピケニコルレス、イタリア名ピチェニコルリが、チリアコによると、この家の姓である。

ところで、オリヴィエーリはアンコーナ文書館の公記録を調査して、次のように報告している。即ち、ある公記録の第十二頁に *Grasus de Pizzicollis* の名が見出され、同じ人が第六十五頁に、一三七八年、「戦争に関する十二人の評議員の一人に選出」され、また第二十二頁に、一三九二年の「評議員の宣誓」の中に名が記載されている。また *Marinotus Nicoai de Pizzicollis* という名も公記録にある。以上の史料からオリヴィエーリは、チリアコの姓は、ピケニコルレスではなく、ピッツィニコルリスが本当であったと結論している。

グラッスス、マリノティウス・ニコライなる兩名が、チリアコの家といかなる関係を持っていたかは不明であるが、チリアコ二十一才の

時、同姓の親戚「キンキウス・ピケニコルレス」の船に乗ってアレクサンドリアへ行っている(後出)。つまり前記の兩名はチリアコの親戚であったのかもしれない。

要するに、オリヴィエーリが主張するように、ラテン名ピッツィコルリス、イタリア名ピッツィニコルリがチリアコの真の姓とみて、しかるべきであると思う。

では、何故チリアコはピッツィニコルリスをピケニコルレスに変えたのか。ピケニコルレスは「ピケヌムの丘陵」の意であり、ピッツィコルリスは、明らかにそれが崩れた形である。即ち、ピケニコルレスの方が原形であり、古代風である。古代の研究家を自任するチリアコが、原形のピケニコルレスを称した気持ちも十分理解できるのである。

さて、第七行目の *PIENTISS.* は *pius* の別形 *piens* の最上級で、碑文によく用いられる。この場合は *parenti* と一致して *pienissimae* の省略形とみられる。訳は「いとも敬虔な母」となる。

第八行目の訳は「そして彼自身にとつて」。彼とはチリアコをさしていると思われる。

第九行目の *KORE* は、オリヴィエーリの推定によると、ギリシア語 *κόρη* (乙女、若妻、娘) で、チリアコが幼時の母の思い出を述べているらしい。L は、同じくオリヴィエーリの推定によると、*libertate* の省略らしい。オリヴィエーリ説に従って、第七行目より第九行目を訳すと、「いとも敬虔な母に、かつ、彼自身にとっては明るく自由な乙女」となる。尚、*CLARA EQ* は *claraeque* の省略形。 *KORE* は

与格とみて訳した。

第十行目の H. M. H. N. S. は、墓碑の最後に来る慣用句で、*Ho monumentum heredem non sequitur* の省略形である。<sup>(82)</sup>「この墓のみ相続人に継がれることはない」の意である。

そこで、諸先学の説を参考にして、最初より通して訳すと次のようになる。

永遠の神より神聖なるものが

穂和な妻にして、チリアコ・セルヴァティコの娘、マシエルラに  
(与えられんことを)。

フィリップの子、チリアコ・ピチェニコルリは、いとも敬虔な母に、かつ、彼自身にとって明るく自由な乙女に(捧げる)。

この墓のみ相続人に継がれることはない。

以上の史料から、チリアコの父は、多分フィリップ、母はマシエルラ、母の父はチリアコ・セルヴァティコであったことが分る。チリアコの家姓は、彼自身によればピチェニコルリ、しかし、実際はピツィニコルリであった。

チリアコ自身は、ラテン名はキリアクス・ピケニコルレス、通常キリアクス・アンコニターヌスと呼ばれた。イタリア名はチリアコ・ダンコーナ(ダ・アンコーナの省略形)で、レオナルド・ダ・ヴィンチのダ・ヴィンチが姓の如くみなされているように、ダンコーナも慣用的な姓となっている。本稿では、我が国で従来よばれている「アンコーナのチリアコ」で通すことにした。<sup>(83)</sup>

アンコーナのチリアコ伝 (1)

チリアコの両親の生没年も、はっきりしないが、ティラボスキは、幼年時代に母のみが出て、父が登場しないこと、母方の祖父が父のようになりチリアコの世話をしていることから、父は早世したのかもしれないと述べている。<sup>(84)</sup> 男きょうだいがあったかどうかは分らないが、ニコローザという一人の女きょうだいがいた。<sup>(85)</sup>

尚、ピツィニコルリ家は貴族の家柄であること、一七五三年には既に断絶していたことも報告されている。<sup>(86)</sup>

チリアコの生年も明確ではないが、ティラボスキは一四〇四年が十四才にあたることから、一三九一年頃に生れたとしている。<sup>(87)</sup> 一体、チリアコのクロノロジを最初に比定したのはティラボスキであり、その後、踏襲されて現代に至っている。チリアコの生年を一三九一年と言いつつ切っている例もある。<sup>(88)</sup> だが果して全面的に信じていいものかどうか、次節において検討したい。

#### 4

チリアコは、わずか九才にして、未知の土地を見たいという望みに駆られたという。その頃、母方の祖父チリアコ・セルヴァティコが、ヴェネツィアへ所用で行かなければならなかったため、少年チリアコを同伴した。彼らは船でアドリア海を北上し(アンコーナ→ヴェネツィアの直線距離は約二三〇キロ)、四月十三日に到着した。<sup>(89)</sup> 当時のヴェネツィアのドージェ(統領)は、ミケーレ・ステーノであったとい

う。

ティラボスキは、ミケレ・ステーノが一四〇〇年一月にドージェに選ばれたこと、チリアコが九才であったことから、四月十三日ヴェネツィア到着の年を一四〇〇年に比定している。<sup>(40)</sup>ティラボスキの年代比定の根拠は、一四〇四年 $\parallel$ 十四才なる事実からの逆算であった。

今、一三九一年に生れたとして、一四〇四年までを算出すると、

一三九一年      〇才  
一三九二年      一才

一四〇〇年      九才

一四〇一年      十才

一四〇二年      十一才

一四〇三年      十二才

一四〇四年      十三才

となる。即ち、一四〇〇年は、正に八才より九才にあたるが、一四〇四年は十二才より十三才に相当し、彼が十四才になるのは一四〇五年となる。

次に、一三九〇年に生れたとする。

一三九〇年      〇才

一三九一年      一才

一三九九年      九才

一四〇〇年      十才

一四〇一年      十一才  
一四〇二年      十二才  
一四〇三年      十三才  
一四〇四年      十四才

即ち、一四〇四年は、十三才より十四才に相当し、一四〇四年 $\parallel$ 十四才という根拠が確かであれば（後に述べるように、その確実性は非常に高い）、チリアコの生年は一三九〇年、または一三八九年ということになる。生れた月が分らないので決定的なことは言えないが、生年を一三九〇年として、以下に年代を比定していきたい。

さて、ミケレ・ステーノがドージェに選ばれたのは、実は一四〇〇年十二月一日である。<sup>(41)</sup>従って、チリアコらが到着した四月十三日は、一四〇一年以降となる。

以上すべてを勘案すると、チリアコの生年は一三九〇年、九才の年は一三九九年、ヴェネツィア到着を一四〇一年に比定できるのではなからうか。

註

- (1) 久志本秀夫「アンコーナのチリアコ伝のために」(相愛女子大学研究論集 第十八巻) 大阪 一九七一年 十七—二十九頁(以下 KUSHIMOTO と略称する)。
- (2) De Rossi, G. B., "De Cyriaco Pizziccoli Anconitano," *Inscriptiones Christianae Urbis Romae*, II, Roma (1898), 356—387. (以下 DE ROSSI と略称する)
- (3) Ziebarth, E., "Cyriacus von Ancona als Begründer der Inschriften-

- forschung." *Jahrbücher für das klassische Altertum*, IX (1902), 214—226. (以下 ZIEBARTH 参照)
- (4) Mackendrick, P., "A Renaissance Odyssey, the Life of Cyriac of Ancona," *Classica et Mediaevalia*, XIII (1952), 131—145. (以下 MACKENDRICK 参照)
- (5) 例が、一四二五年、ローマからの帰途、チリアコはストリア、ヴィチネルホ、オルヴァ、エーナを経、マンローナに戻った。(DE ROSSI, 357) ZIEBARTH, 217 にその行程が記されている。しかし、この点については、種々の著者 MACKENDRICK, 135 以下、何れ記載がなされている。
- (6) Tiraboschi, G., *Storia della letteratura italiana*, VI, I, Modena (1776), 134—163. (以下 TIRABOSCHI 参照)
- (7) スカラモンティによるチリアコ伝の原本は散逸したが、フョリーチ・フョリチアーノによる写本がトリヴェーゾに存在している。(Treviso, Biblioteca Capitolare, I, 138)。
- (8) Spadolini, E., "Il biografo di Ciriaco Pizzecoli," *Le Marche*, I (1901), 70—72. この跋文については、次の文献があるのみで、新しい研究が待望をわづらう。 Cf. KUSHIMOTO, 19. フョリチアーノに關しては、 Cf. KUSHIMOTO, 19—21.
- (9) Colucci, G., *Delle antichità picene*, XV, Fermo (1792), 1—155. (以下 COLUCCI 参照) トリヴェーゾの写本の復刻版がイギリスのマンチンゴット (Cf. Ashmole, B., "Cyriac of Ancona," *Proceedings of the British Academy*, XLV (1959), 26, n. 2.) の同写本の主要部分を占めるチリアコ伝の新編が、イタリヤのカンパーナに於いて (Cf. Campana, A., "G. Manetti, Ciriaco e l'Arco di Traiano," *Italia medioevale e umanistica*, II [1959], 489, n. 1) 述べられておる。
- (10) Voigt, G., *Die Wiederbelebung des classischen Altertums oder*

マンローナのチリアコ伝 (二)

- des erste Jahrhunderts des Humanisms, I, Berlin (1880), 271—288. 上の諸版については、 Cf. KUSHIMOTO, 25, 26. 私はイタリヤ語版 (Voigt, G., *Il Risorgimento dell' antichità classica ovvero il primo secolo dell' umanesimo*, I, Trad. da D. Valbusa, Firenze [1888], 269—285. 以下、このイタリヤ語版を VOIGT 参照) を利用した。シュニッセルによる補註が別に刊行されているため (Zippel, G., *Giunte e correzioni*, Firenze [1897])、チリアコに關しては、フランスの研究が援用されて、フョイクトの説が一部訂正されている。尚、フョイクトへの補註は、フョイツ語版では発行されていない。
- (11) Bodnar, E. W., *Cyriacus of Ancona and Athens*, Bruxelles-Berchem (1960). (以下 BODNAR 参照)
- (12) ボドナーの功績は、発行部数が極めて少く、しかもデ・ロッシがほぼ重複を置かなかつたモローニの刊本 (Moroni, C., *Epigrammata reperta per Illiricum a Cyriaco Anconitano apud Liburniam*, Roma [ca. 1660]. Cf. KUSHIMOTO, 22—23) を使つて一四三五—一四三七年のチリアコの旅程を復原した所にある。一四四四年以降の旅程、特に一四四七—一四四八年については、一九一〇年、サッパディーニによつて紹介された断片 (Sabbadini, R., "Ciriaco d'Ancona e la sua descrizione autografa del Peloponneso trasmessa da Leonardo Botta", *Miscellanea Ceriani*, Milano [1910], 183—247.) が紹介されている。残念ながら、ボドナーは史料の原文を紹介することに意を用ひ過ぎたため、整理された評伝の域には達していない。
- (13) 以下の記述は、次の諸資料より採られた。 *Enciclopedia italiana*, III, Roma (1929; ristampa anastatica 1949), 151—159. *Dizionario enciclopedico italiano*, I, Roma (1970), 414—415. *Encyclopaedia Britannica*, 11th Edition, I, Cambridge (1910), 951—952. *Encyclopaedia Britannica*, I, Chicago (1967), 885. *Marche: Guida d'Italia del Touring Club Italiano*, Milano (1962), 67—87.

Cappelli, A., *Cronoloia, cronografica e calendario perpetuo*, Milano (1930), 403—404.

最後のカッペリの著作には、次の諸文献より要約されたマンローナ史の年表があり、有益であった(以下CAPPELLIと略称する)

Bernabei, L., *Cronache anconitane etc.*, Ancona (1870).

Clavarni, C., *Sommario della storia d'Ancona*, Ancona (1867).

*Guida di Ancona descritta nella storia e nei monumenti*, Ancona (1884).

(2) *Enciclopedia italiana*, III, 155.

(3) ステラキーン「地理学」第五巻、Mの2。

(4) *Encyclopaedia Britannica*, 11th Edition, I, 952.

(5) *Marche : Guida d'Italia del T. C. I.*, 67.

(6) *Enciclopedia italiana*, III, 155.

(7) リウイウス「ローマ史」第四十二巻、1の3。

(8) カユサル「内政記」第一巻、11。

(9) ローマより北へ向かうフラミニア街道は、約二〇キロでウンブリア地方のヌケリア(現在ノチェラ・ウンブラ)に達する。更に北へ進み、カレスで北東へ向きを変えると、やがてアドリア海沿岸のファヌム・フォルトゥナエ(現在フォーノ)へ、ここから海岸に沿って西北へ行くとマリニヌム(現在リミニ)がフラミニア街道の終着点である。一方、ヌケリアより北東約七〇キロでアンローナに到着する。ローマとタルマティアを結ぶ幹線の重要地点としてのアンローナの位置が理解されるであろう。尚、フラミニア街道については、次のすぐれた研究がある。

Ashby, T. and Fell, R. A. L., "The Via Flaminia," *Journal of Roman Studies*, XI (1921), 125—190.

(10) 後掲地を含むアドリア海沿岸の五つの都市、リミニ、セニガリア、ペサロ、フォーノ、アンローナを参照。

(11) *Enciclopedia italiana*, III, 156.

(12) Olivieri, Annibale degli Abati, *Commentarium Cyniaci Anconitani*

*nova fragmenta notis illustrata*, Pesaro (1763). (以下OLIVIERIと略称する) チリアコのコンメンタリアについては KUSHIMOTO, 21—24を参照をたい。オリヴィエリが刊行した断片は、一四四二年八月より一四四三年三月までのチリアコのイタリア旅行の部分にあたる。

(13) OLIVIERI, 2.

(14) OLIVIERI, 2, n. 4.

(15) COLUCCI, 19, n. (b). コルッチは、自己の刊本の序論に、オリヴィエリが引用した墓誌銘を使って、チリアコの家系を考証している。コルッチの言によれば、トレヴィーン写本にも墓誌銘が写されているように(ただし刊本には序論に出てくるだけである)、オリヴィエリとトレヴィーン写本との文字の異同が、コルッチによって指摘されている。トレヴィーン写本の墓誌銘が、もし筆者のフェリチアーノによって写されたのなら、その出所をめぐって新たな問題が提起される。

(16) ラチン語形容詞 *silvaticus* (森の、野生の) は、イタリア語 *selvatico* なる。 Cf. Calonghi, F., *Dizionario latino-italiano*, Torino (1964), 2535. 従ってイタリア名をセルヴァティコとした。尚、サルヴァティコ (TIRABOSCHI, 137) / セルヴァティチ (COLUCCI, 22) と同じような場合もある。

(17) TIRABOSCHI, 137.

(18) OLIVIERI, 2, n. 6.

(19) COLUCCI, 56. 原文は、Cincio picennicoleo consanguineo suo, 'スカラモンチヤによる伝記の一節である。ここで注意すべきは、スカラモンチヤもこの一族の姓をピッツィニコリスとし、チリアコがラウレンティコロニスにしていることである。このことは、スカラモンチヤによる伝記は、チリアコが提供した資料を一人称より三人称に変えたものには、少なくともラウレンティコトの説を裏付けるかも知れない。 Cf. VOIGT, 269, n. 2. Lewis, C. T., and Short, C., *A Latin Dictionary*, Oxford (1958), 1381.

(20) OLIVIERI, 2, n. 7.



註の②に引用したルイスとシェートのラテン語辞典、八三三頁に、H. L. E. T. M. H. N. S. hic locus et monumentum heredem non sequitur. の語形であると説明されている。monumentum に一致する日は hoc である。H. M. は hoc monumentum である。

② 「アンコーナのキリアコス」……栗野頼之祐「西洋金石学」(世界歴史事典 5) 東京 一九五六年三八八頁。

③ 「アンコーナチリアコ」……渡辺金一「クワトロチェントのイタリアとオスマン帝国」(ヨーロッパ精神史の基本問題) 東京 一九六六年 一八八頁。

④ TIRABOSCHI, 137.

⑤ COLUCCI, 58.

⑥ Mazzuchelli, G. M., "Ancona (Ciriaco d-)", *Scrittori d'Italia*, I, 2, Brescia (1753), 682.

ここで「アンコーナ」がチリアコの姓の如く扱われているのに注意されたい。マツケルリの論述は、一七五三年当時におけるチリアコの資料をすべて紹介し、解説している所に意義があった。その一部は、今なお有用である。

マツケルリは、ジュリアーノ・サラチェーニの *Notizie Storiche d'Ancona* 第一部、七頁を引用して、チリアコが名門の出であることを述べている。コルッチもその刊本の序論において(二二二頁)、サラチェーニを引用して、貴族の家系であったことを述べ、また、それが若くしてアンコーナの市政に参画したこと(五十五頁、註二十八)、各地の君主の宮廷で歓迎されたことを説明するという。しかし、チリアコの家は必ずしも豊かではなく、一商人として出発しなければならなかった。

⑦ TIRABOSCHI, 137.

⑧ Sabbadini, R., "Ciriaco d'Ancona", *Enciclopedia italiana*, XI, Roma (1931), 438.

エンテクローペディア・イタリアーナのために書かれたサブバディーニによるチリアコ略伝は、部分的に問題はあるが(例えば一四三六年のアテネ旅行を一四三七年としていること)、その要を得た文献表とあいまって、最

もすぐれたものの一つである。サブバディーニは、チリアコが一三九一年にアンコーナに生れ、一四五二年にクレモーナで没したとしている。

⑨ COLUCCI, 52.

⑩ TIRABOSCHI, 137.

⑪ Da Mosto, A., *I dogi di Venezia*, Milano (1960), 152.

⑫ CAPPELLI, 347.

(一九七二年九月三十日稿了)

(大学音楽学部 助教授)